

油井亀美也さん：「故郷の村に帰ったような気持ちになるところもありました」

（大使館広報誌「ヤポーニヤ」２０１６年春号巻頭インタビュー（和訳））



©JAXA

宇宙船ソユーズでロシア人クルーと共に活動し、国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）第４４次／第４５次長期滞在クルーとなった、日本の宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）の宇宙飛行士である油井亀美也（ゆいきみや）さんが、星や科学、ロシア文化を愛する気持ちについて語ってくれました。

（聞き手：大槻耕太郎）

問：宇宙飛行士になった理由は？

答：小さい頃、小さな村で生まれて育ったのですが、そこで見える星がとてもきれいだったのです。そういう星を見ることが好きで、宇宙飛行士か天文学者になりたいと思いました。

ただ、いろいろな事情で自衛隊

に入ることになりました。ロシアと日本では状況が違います。ロシアだと空軍に行ったとしても宇宙飛行士への道はあるのでしょうけれど、日本ではそういう道がなかったんで、その時点で宇宙飛行士になることはあきらめなければならなかったのです。しかし、運良く日本でも宇宙飛行士の募集があったので応募しました。

問：ロシアに初めて来たのはいつですか？

答：４年くらい前になると思います。最初はロシア語を学ぶためです。

問：それは、宇宙飛行士になることが決まってからですか？

答：はい、決まってからです。航空自衛隊にいたので、実はそれまでもロシア語を勉強したことはありました。ロシアの空軍機による領空侵犯を想定して、「こっちに来るな」といった警告の言い回しを暗記で覚えました。こうして、今度は宇宙飛行士としてロシアに来たわけですが、私はロシアに入国させてもらえるのかと、少し心配しました。

問：過去の経歴がゆえに、ですね？

答：はい。でも、来てみたら、皆さんとても親切でした。日本と少し気持ちが近いところもあるようです。私の故郷の村に帰ったような気持ちになるところもありました。

問：「日本に近い」というのは、具体的にはどのような点ですか？

答：何と申しますか、最初は友達になるのが難しいのですが、いったん打ち解けてしまうと家族みたいに優しくしてくれて、利害無くやってくれるところですね。私の村でもそうでした。

問：ロシアに来られて、ロシア語の勉強を本格的に始められたわけですが、始めた年齢は決して早くはないですね？

答：はい。40歳を過ぎていましたからね。

問：語学の習得には、かなりの困難があったのではないのでしょうか？

答：そうですね。最初の1年はロシア語の授業が嫌いで仕方がなかったです。ですが、ロシアのソユーズで宇宙に行くためにはロシア語が必要だと分かっていたいました。そこで、コミュニケーションのツールとしてロシア語が必要なのだ、もっともっとロシアの人たちとコミュニケーションを取ろう、と決めました。それで、トレーニングセンターに来た時に、いろいろな人に声をかけて、「私とメールをして下さい」とか「スカイプをして下さい」といったお願いをしました。その結果、ロシア語が急激に上達するようになりました。

問：最初のうちはずっと基地の中で過ごしたのでしょうか？それとも外に行く機会もあったのでしょうか？

答：最初はホテルに泊っていました。そこでだいたい1日4時間授業を受けて、そのあと実際のロシアに触れるために4時間くらい外を歩く、といったような日が1か月くらい続いたのでしょうか。それから米国ヒューストンに帰り、1年くらい経って、大きな成果になってきました。もし途中でロシア語をあきらめていたら、何の成果も得られなかったでしょう。「継続は力なり」

ですね。継続は大事だと思います。



©JAXA/NASA

問：ソユーズで出発する前の、ロシアでの訓練の感想はいかがですか？

答：最初は大変だったですね。ロシア語で授業を受けて、通訳の方はいましたが、私は通訳の方をなるべく使わずにロシア語で習得しようと思いました。試験では、ロシア語でかなり手厳しく、細かいところまで質問されました。最初は、ロシアでの訓練というと身構えてしまうところがあったのですが、皆さんとても優しく、私が一生懸命にやっていたら私を認めてくれるのです。次第に、毎回ロシアに来るたびに、ロシアでの訓練が楽しくなってきた、次のロシアでの訓練が来るのが楽しみに思えるようになりました。

問：ロシアに来て驚いたことは何かありますか？

答：私の実家がある長野県でもマイナス20度くらいに下がりますが、ロシアは、寒さで痛みを感じるほど、それよりも寒かったです。そういう中で、ロシアの皆さんは何か楽しみを見つけています。たとえばかなり貧しい生活をしている方であったとしても、生活の楽しみ方を知っています。私は、自分がお金や経済みたいなものにいかに毒されているのかを知った思いです。それが驚きでした。一番強い印象を受けたのは、モスクワ音楽院の学生さんの無料のコンサートです。行って見たら、お年寄りの方々などが聴いていました。

そこでは誰もが幸せなのですよ。お年寄りにとってはいい音楽が無料で聴けて幸せだし、演奏している方には、彼らの音楽を聴けることをありがたいと思ってくれるお客さんがいる。こういうアイデアはいいよな、と思いました。こういった、何かに気付かせられる出来事が、いたる所でありました。それから、私もロシアの人から贈り物をいただきましたが、例えば手作りのものなど、あまりお金をかけないものでした。あまりお金をかけずに生活するのはすごいな、こういう生活もあるのだなと思いました。

問：ロシアで楽しんだこと、余暇で良くやっていたことは何かありますか？

答：モスクワの街のいろいろなところを散歩するのが好きでしたし、ツアーに参加して歴史的な場所を訪ねたりもしました。なるべくロシア人の方が参加するロシア語のツアーに参加しました。そうすると費用は半分とか3分の1くらいに安いのです。同時に、楽しみながら歴史や文化を知りました。ロシア滞在のメインはソユーズの勉強でしたが、私の先生が最初から私に「語学と歴史と文化はセットで勉強しなさい」と言っていたので。まあ、その教えのとおりになったわけですね（笑）。



©JAXA/NASA/AUBREY GEMIGNANI

問：宇宙で活動する中で、米国とロシアの宇宙飛行士と共同生活を送ったわけですが、共同生活の中のエピソードは何かありますか？

答：例えば、地上の政治の世界で何があっても、上の宇宙では本当に家族みたい

に仲良くやっています。私は最初、米露の宇宙飛行士の仲を取り持つような役目・橋渡しをしようと思っていたのですが、それをする必要はありませんでした。特にロシアのオレグ（・コノネンコ）さんとは、彼がコマンダーで私はその補佐という関係だったということもあり、接点は多かったのですが、宇宙に行ってから、二人とも写真を撮ることが趣味だとわかりました。それで、よく街の通りを歩いている時に、「おまえ、あれを撮ったか？」「撮ったよ」などと言いながら、撮った写真をお互いに見せ合ったり交換したりしました。こうして私たちは仲良くやっています。

問：宇宙飛行士というものは、かなり危険な環境に置かれています。そのような環境の中で、言語も生まれ育ってきたキャリアも違う人たちが一緒に働いているわけですが、そのような「違い」をどのように克服されるのでしょうか。

答：私は、それぞれの国にそれぞれの文化があるということ、人はそれぞれ同じではないということを良く分かっています。やはりそこで働く人たちが互いに尊敬し合っているところが、国際宇宙ステーションのすごいところだと思います。私自身も宇宙ステーションでは日本の文化を維持していて、何か



©JAXA/NASA

を我慢するという必要はありませんでした。クルーの一人一人が持っている能力は非常に高いので、互いにそれを信頼していました。何かが起こればお互いに助け合っ
て一つの目標に向かって仕事を
するということが成立している、す
ばらしい環境でした。それが地上
のどこででもできれば、もっと住
みやすくなるのでしょうかけれどね。

問：それならば、皆で宇宙ステーションに移住した方が良さそうですね（笑）。

答：はい。本当に素晴らしいところ
です。しかし、とても危険な場
所であるということは皆よく分か
っていますので、ただの「仲良し
クラブ」ではうまくいきません。

自分のなすべき任務をしっかり自

覚し、自分の持ち場を守ることは、仲間の敬意と信頼を得るために無くては
ならない条件です。そこはやはり厳しい世界です。任務で失敗すれば、仲間
の信頼を失い疎外されてしまうでしょう。そういうことがないように一生懸
命がんばりました。これは私個人だけに关わる話ではなく、私は自分の国を
代表して参加したのですから。

問：宇宙分野での日露の協力について教えてください。これまでの国際宇宙ステ

ーションにおける活動の中で、これまでにどのような成果がありましたか？
今回、油井さんには一定のミッションがあったと思うのですが？

答：私が一番紹介したいと思っているのは、高品質のタンパクの結晶についてです。これは、私が初めて宇宙ステーションでやった実験です。その時に私が使ったタンパク質は、実はロシアの方々の研究用のサンプルと一緒にソユーズで宇宙に運ばれてきたものでした。つまり、共同研究でした。私がサンプルを設置して、実験を行って、別のソユーズで返却しました。これが、私が最初に出した成果であり、日本とロシアの共同研究だったということです。非常に強い思い入れもあります。その実験は、新薬の研究開発のためのものでしたので、新薬開発の面で実際に成果が出れば、「日本とロシアで協力して良かったね」ということになると思います。

問：あまりなじみの無い方にも簡単に説明するとすれば、その新薬というものは難病治療のためのものですか？

答：そうです。例えばアルツハイマー病を治すためのものがあります。また、最近話題の i p s 細胞というものがあります。この細胞は、分化すればどのような臓器にもなれるのですが、分化しないと癌になってしまうということも分かってきました。そこで、分化していない i p s 細胞を見つけなければならないので、そのような細胞を効率的に着色するためのタンパク質を作りたいというのが、私たちが行った実験です。それが実用化されるようになれば、人々の生活を大きく変えるものになることでしょう。ロシアもこのような研究に参加しています。私自身、良い実験結果が出たと聞いていますので、楽しみだなと思っています。

問：宇宙活動における日本とロシアのそれぞれの優れている点とは、どのようなものですか？

答：ロシアは宇宙活動の分野では長い歴史を持っています。有人飛行の経験も長いですし、経験という点では日本がロシアにかなわない部分は圧倒的に多いです。また、ロシアは古い設備を使っているのですが、その古いものを維持しながら少しずつアップグレードしています。大きくは変えないのですが、安全性の高いものを作っています。これらがロシアの優れている点だと思います。日本は、全体的な経験としてはまだまだ浅いのですが、新しく宇宙活動に出てきた国として、新しい技術をいろいろと挑戦的に開発しています。特に、日本が開発・運用している無人の宇宙ステーション補給機「こうのとり」(HTV) (編集部注：HTV：H-II Transfer Vehicle) は新しい方式で、ISSの近くまで接近したHTVをロボットアームでつかむと

いう進んだ技術を使っています。ロシア人も、HTVの中を見たらとてもきれいで大きいので、「これはすごいな！」と言っていましたから、新しい技術というのが日本の優れているところだと思います。ロシアの経験は私たち日本人も利用させてもらい、私たちが優れている技術はロシア人にも使ってもらおうということをお互いにしていると、融合した効果で、研究開発が進む速度も速くなるでしょうし、できあがったものもすばらしいものになると思います。今後、どんどん協力を進めていくことができれば良いなと思います。

問：今後の日露協力全般に対する期待はどのようなところにありますか？

答：私自身がロシアを大好きです。日本の宇宙飛行士の中でも、アメリカの宇宙飛行士の中でも、ロシアをこれだけ好きな宇宙飛行士はきっといないでしょう。「おまえはロシアが大好きなんだな」と、よく周りから言われます。

問：そこまでお好きなら、ロシアに移住したくはなりませんか？

答：私はロシアに住みたいと周りに言っているのです。ロシアの方々もそのことをよく知っています。そういったいろいろな面で日露の協力が進んでいけば良いと思っていますし、私自身、日本とロシアの橋渡しをして、日本とロシアの明るい未来が創ることができれば良いな、と思っています。



©JAXA/GTTC

問：最後に、今後の抱負又はご予定についてお聞かせいただけますか？

答：フライトが終わってすぐなので、何をするのかを言うのはなかなか難しいですけど、希望としてはまた宇宙に行きたいです。まあ、それも難しいでしょうから、まずは大西さん（編集部注：ISS第48次／第49次長期滞

在クルーのフライトエンジニアに任命された、JAXA所属の宇宙飛行士大西卓哉（おおにし たくや）さんが今年またソユーズで宇宙に向かう予定ですし、来年の末には金井さん（編集部注：ISS第54次／第55次長期滞在クルーのフライトエンジニアに任命された、JAXA所属の宇宙飛行士 金井宣茂（かない のりしげ）さん）がソユーズで打ち上げられる予定ですので、その2人の飛行を助けていきたいと思います。

お時間を割いていただきありがとうございました。（編集部）